

分類から見た『文選』雑詩

森田 浩一

Zashi of “Wen Xuan” from the Aspect of Classification

MORITA Koichi

Abstract: Zashi of “Wen Xuan” is the category based on the category in the preceding anthologies of “Wen Xuan”, and are the titles of the poems contained therein. The general way of poems in posterity — expressions of daily feelings — had become common in Song Qing Liang dynasties, where the production of wuyanshi (five-syllable poetry) was flourishing. Those poems that did not fit in certain frame (category) were included in the category of “miscellaneous”, and eventually the poems that were located as their source were also called “zashi” when they were untitled. Poems which were fascinating and full of energy had thus come to be called “miscellaneous (雜)” poems.

Key Words: Wen Xuan, Zashi, classification, branch of literature, zongji, wuyanshi, shifu

要旨：『文選』「雑詩」は、『文選』に基づいた先行する選集における類目に拠って立てられた類目であり、また、そこに収められる詩のタイトルである。日々の感興を詩に託すという、後世の詩の一般的なありかたが五言詩の制作が盛んになる宋齊梁では普通となった。そのような一定の枠（類目）に収まりきれない詩は選集において「雑詩」という類目に入れられ、やがてその源流として位置づけられた詩も無題の場合には「雑詩」と呼ばれるようになった。エネルギーに満ちあふれた魅力的な詩が、こうして「雑」詩と呼ばれるに至ったのである。

キーワード：文選、雑詩、分類、流別、総集、五言詩、詩賦

六朝梁の昭明太子編になる『文選』は、同時代の同様な書物がほとんど今に伝わらぬ中、今なお目にすることが出来る文学作品のアンソロジーで、この間中国のみならず我が邦を含め所謂中国圏においても尊重されてきた。

この『文選』は詩歌文章の選集として、収録作品を類目を立てて類別している。その中で、「詩」類の末尾あたりには、「雑歌」「雑詩」「雑擬」と、ここだけに「雑」ということばを関する類目が並んでいるのが目を引く。

類目というものが収録作品の分類を整然と行い、読者にインデックスとして美しく機能することを第一の意義として持つものであるなら、ここに見られる「雑」を関する類目の羅列は、「その他」という意味合いの美しくない類目を立てざるを得なかったということの故に、あるいは分類の瑕疵と取られかねないことであろう。

しかし、古今の読者にはっきり了解されているのは、この「雑歌」「雑詩」に収録された詩歌が、まことに魅力にあふれた作品群であるということだ。それゆえ、中国文学に少しでも興味関心を持った者であれば、これらの「雑」を現代風な語感における雑多、雑然という意味での雑には取りえないのである。

本論は、中国において「総集」と類別される選集である『文選』に見られる、「詩歌」という類目の下位分類に登場する「雑」の字を関した類目に注目して、「雑詩」について確認するものである。

1

まず、分類について確認しておこう。

緑川によると、分類は、以下の4つの段階に分けることができる¹。

- (1) 対象を分けること(区分)
- (2) 分けられた対象を体系的に配置すること(体系化)
- (3) 特定の対象を分類体系の中に位置づけること(分類作業)
- (4) 分類の特定の項目に位置づけられている対象を取り出すこと(検索)

さて、『文選』においては、どのような区分が、どういった区分原理にもとづいて行われているのだろうか。

まず、区分の第一層についてみれば、最初に立てられている類目が「賦」で、以下「詩」、「騷」、「七」、「詔」、「冊」と続き、その後は省略するが、最後は、「哀」、「碑文」、「墓誌」、「行状」、「弔文」、「祭文」という人の死と生涯、死後に関わる文章に関する類目がまとまっておかれている。ここから見て取れるのは、『文選』の編集に関わった人達にとって、第一の区分原理が、「賦」、「詩」という作品のスタイル・形式と、「詔」、「冊」といった作品のテーマ・内容とが混在した形であっても不自然ではなかったということだ。

「騷」や「七」はスタイルとしては「賦」に近いといってよいものであるが、これらが「賦」とは別に独立して類目となっていることなども考えると、『文選』の周辺にいた人達にとっては、文体と内容が分かちがたく結びついていたこと、また美しい「文章」(今の文章という謂ではなく、修辞がほどこされた文学作品全体を覆う名称²)から「詩」と「賦」を除いた作品群を総称する、あるいは「詩」と「賦」となる大きな類目がなかったということだ。

『文選』の分類原理が、たとえば生物学の分類におけるような、あるいは、図書館の書籍の分類においても見られる、科学的な原理ではないことはここですでに明らかである。第一層の区分原理が何か経験的に構築されてきた原理であることが一目瞭然であるからだ。それは、たとえば有韻か無韻かといった一定の基準で分類してみようといった科学的な分析ではない。

生物全体をいかに「区分の原則」を守りつつ、シンプルに美しく分類できるかという格闘から、進化分類学、数量分類学、系統分類学といった、生物の形質に着目した分類の学問が生まれてきた。区分の原則とは、分類の対象が必ずどこかの類目に属しており(包括的)、且つ一つの対象が必ず一つの類目にだけに属している(相互排他的)という原則である³。そして、分析的に系統づけられ、明瞭に検索できるためには、分類に収まりきれなかった「雑多」なものを入れる類目などないほうがいい。そういう類目を立てざるを得なかった分類は、美しくない。

動物と植物の区分原理でさえ、簡単にはいかない生物全体の分類と比べると、人為の所産である「文章」の分類は、たとえば『文選』を見れば、たやすく整然として行われているように見えるのだが、それは当然のことなのだろうか。いや、人は自分が書いているものがいずれどのように分類されるかということを意識せずに文章を書くのだ、分類を想定せず進化していく生物と同じように、文章も意図せぬ変異を生じ、変化し、進化するのだと現代の我々は思ってしまうかもしれない。

『文選』の分類の「包括」性のありかたと、「詩」における「雑詩」という、分類ということから見るとエレガントではない類目を置いての「相互排他」のありかたは、『文選』編集の時代、状況ではどんな意味を持っていたのだろうか。

1 以下、分類については、緑川信之「分類を見つめなおす：区分原理に注目して」(『情報の科学と技術』66巻6号、2016年)を参照した。

2 「文章」については、興膳宏「六朝期における文学観の展開」(『中国の文学理論』(筑摩書房、1988年)所収)を参照されたい。

3 前掲緑川論文。

2

『文選』が分類の対象としたものの全体はいかなるものであったのか。

これを確認するに当たって、まず『漢書』芸文志の分類について振り返っておくこととしよう。前漢成帝の時代、劉向・劉歆父子によって王朝の蔵書目録が作られた。『漢書』芸文志は、この劉父子による『七略』に基づくもので、目録学の萌芽といえる。

『七略』が対象としたのは、宮中の蔵書全体である。これを包括的且つ相互排他的に分類する必要があった。蔵書に記された「文章」すべてを劉父子はまず六つの類目に分類する。すなわち、「六芸略」、「諸子略」、「詩賦略」、「兵書略」、「術数略」、「方技略」である。

この六分類が、大きくは内容という区分原理によって分けられながら、「詩賦略」のみが韻文であるという形式による区分原理によっており、それによって生じる分類にねじれが生じていることについては、興膳宏氏が早くに分析しているとおりである。

詩賦略という文体上の基準をも加味して設けられた部門が存在することの意味は大きい。……『史記』百三十篇を六芸略春秋家類に著録される司馬遷、諸子略儒家類に著作を記される孫卿（荀子）・陸賈・賈誼……、そして同雑家類に名に見える淮南王劉安・東方朔、これらの人々はいずれも賦の作者としてもう一度詩賦略に顔を出す。系統の違う学派、たとえば儒家類と雑家類に同一人物の著作が録されることはむしろかしいが、詩賦略と他の部類の間にはそうした障壁がないと言える。⁴

『七略』は書籍の分類目録であって、著者の分類ではない。だから、分類の原則上、著者について相互排他的になっている必要は、実はない。しかし、前漢という時代にあっては、述作という行為の力点は「一家の言」を成すことに在ったのだ。それゆえ、書籍を分類する中でも、その述作者を「家」として数えている。書籍はまだまだ貴重なもので、一家として立つ者のみはその言を書籍という形にできたのであり、同時に、一家の言として成立するためには、そこで表明される内容が何らかの「流」、たとえば儒家の流に必然的に入らねばならなかったことを物語る。

したがって、『七略』は、詩賦略以外の類目においては、そこに分類される書籍はその著者と分かちがたく結びつき、一家の言の流別が配列されることとなる。

だが、一家でなき者も著作を世に出すようになり、書籍が多く存在するようになったとき、書籍と一家の言の結びつきも弱まり、後世の目録においては「家」でカウントすることはなくなってしまうのである。

『七略』は、まだ書籍が少なく、一家の言たりえる著述のみが書籍となりえた特殊な状況において、書籍の内容を「家」にもとづく流別でまとめるという分類原理で、見事に当時の書籍の「区分の原則」をそれなりに成功させて、成し遂げたと言ってよい。

ただ、ここで既に「雑」の字を冠する類目がいくつか登場していた。諸子略における雑家、詩賦略における雑賦、方技略における雑占である。

諸子略は、儒家、道家、陰陽家、法家、名家、墨家、縦横家、雑家、農家、小説家と類目が立てられる。儒家を漢王朝は最も尊び、諸家の思想を王朝の価値観によって配列しているのが見て取れる。小説は、近代に至るまで、公の場では敬意を払われないものであった。

類目の順序からして、雑家が儒家から縦横家までを受けての「雑」であることははっきりしている。

雑家なる者の流は、蓋し議官に出づ。儒・墨を兼ね、名・法を合わせ、国体の此れあるを知れば、王治の貫かざる無きを見る。此れ其の長ずる所なり。盪なる者之れを為せば、則ち漫羨として帰心する所無し。
（『漢書』芸文志）

4 前掲興膳論文。

雑家とは、古の議官に発する流であるとする。諸子の思想に分別しきれない、思想を総動員しての議論、そのような著述がここにならんでいるのだ。雑とは、儒家とか法家とかに分類しきれない、それらをまじえたという意味である。そのあり方が優れていれば、王道が国家全体に通貫していることがわかるが、放埒な者がこのような諸家を交えた議論をすると、とりとめなく帰着するところがなくなってしまう。

儒家が国教的な扱いを受けるようになり始めたばかりの時代である。政治の表舞台では法家一辺倒だった秦は滅び、様々な思想が開花した諸子の時代の余香はまだ感じられたであろう。思想が交錯する議論こそが王道のあらわれであるとは、覇道が思想を一つに収束させることを連想させて、現代においても重いことばである。一方で、放恣な議論にながれば、まとまりがなくなることになるのではあるが。

ここに現れる雑が意味するのは、下手をすれば本当に雑多で粗雑なものになってしまうかもしれない、分類の型に収まらないエネルギーであろう。崇敬すべきものとして、雑の入り込む余地のない六芸、すなわち六経という經典の世界とは違うのである。

雑占についてはどうであろうか。太史⁵が司る国家の正式な占卜、正当な公の占いが、天文、曆譜、五行、著龜にまとめられるのとは異なり、民間レベルでも盛んに行われた「日者」(占いを行うもの)たちによる様々な占いの様子がここに反映されていると見ることができる。天文は国家の史官の重要な観察対象であったし、著龜にいたっては、それが「聖人の用いる所」であったと芸文志は記すのである。公の粹に収まりきれない、分類にきれいに入りきれない、「雑」で表されるエネルギーをここに感じ取ることができる。秦漢交替期に活躍した方士・方術を行う者たちの存在感もここには在る。

さて、雑賦についてはどうであろうか。詩賦略は前述したような他の類目とは異なった性質があるが、それだけではない。詩賦略には小序がなく、いわゆる流別の起源が記されない。その原因については既に議論があるところだが、国家の官の職掌に出ないとは、まさにそれが新しく勃興してきたジャンルであることを表している⁶。

とはいえ、宮中に所蔵される詩賦の書物はまだまだ少なかった。しかし、当時力をもっていた賦には、やはりお利口に分類におさまらないエネルギーがあったのであろう。屈原、陸賈、孫卿(荀卿)に源流を持つと示される三類の賦の後に、そこにおさまらぬ雑賦の書名が配列される。

六芸(六経)や国家の官が公の職掌としたことがらに起源を措定できない新たなエネルギーをはらんだ詩賦の、その収まりきれない部分が雑賦に表れているとみることができる。

ただ、雑家、雑賦、雑占という『七略』中の三つの「雑」を関する類目について付け加えておかねばならないのは、どうも単純に『七略』編纂に当たって、分類にうまく収められなかったものを雑類としようということではなかったと思えることだ。

雑家には、「雑家書八十七篇」、「雑家言一篇」という「雑家」という名を持つ書籍が存在している。雑賦では、収められる十二の書籍のうち、実に十の書名に「雑」字がついている。その十のうち九つの書物は、『雑行出及頌徳賦二十四篇』の如く、「雑〜賦」という書名である。雑占も「噍耳鳴雑占十六卷」という書名が見えている。どうも雑家にしても雑賦にしても、そう名付けられる類目にはそういう名称の書籍が先行して存在していたということが注意しておいてよい。

3

『文選』が分類の対象としたものは何だったか。

『文選』の序が記すように、それは人々の著述の成果から、特定の対象を除外していったものであった。昭明太子蕭統が除外の対象としたのは、「姫公の籍、孔父の書」(周公の聖典、孔子の経書)、「老荘の作、管孟の流」(老子、莊子、管子、孟子の哲学書)、「賢人の美辞、忠臣の抗直、謀夫の話、弁士の端」(賢人の美辞、忠臣の直言、謀略家や弁論家の話術)、「讚・論」と「序・述」を除く「記事の史、繫年の書」(事を記録し年ごとにならべた史書)であり、後世の四部分類でいえば、これらが除外されて残るものは、集部に分類される文章、すなわち今の文学ということばにだいたい相当するものであることが宣言される。

5 『周礼』春官。

6 内山直樹『『七略』の体系性をめぐる一考察』(『千葉大学人文研究』第三十九号、2010年)

このように分類の対象を消去法で定義していることには大きな意味がある。正面切って、何らかの原理原則を示し、分類の対象となる全体集合を定義する姿勢はここにはない。

「姫漢自り以来、眇焉として悠かに遡く、時は七代を更え、数は千祀を逾ゆ。詞人才子、則ち名は縹囊に溢れ、飛文染翰、則ち卷は緗帙に盈つ。」(『文選』序)周・漢以降、長い年月が流れ、文人才子も名作も多く存在するようになった。そこから優れたものを集める必要があり、『文選』は編まれたと蕭統は言う。

膨大な文章全体から、特定のジャンルの文章を除外する。除外される集合は明確な定義があるが、残った集合はあいかわらず、様々なものを含んだままである。すなわち、無限集合からいくつか有限集合を除いても、残るものはやはり無限集合であるがごとく。

しかし、『文選』は、そうして残った無限集合——分類の原則をいかにも実現し難く見える対象に立ち向かいながら、第一層の分類は見事に完成させているのだ。

『文選』序は文章の変遷を論じて、賦より始めて文体について流別の観点を持ちつつ整理して述べる。ここにまさに中国における著述のあり方の、ある本質が表れている。表現者は文章を盛り込む形式・内容を、源流からの踏襲、つまりは伝統を強く意識して表現するのである。文体・形式を離れて述作が行われ、その結果、作品が開放的に進化していくということは中国では起こらなかった。いや、そもそも中国に限らず、文章とは型の継承の中で束縛されて進化するものなのだろう。だから、『文選』が実際に行っているのは、表現者たちが意識していた型、文体を類目として立てていくことに他ならなかった。

『文選』が収録する文章とはどのようなものか、それを正面切って理屈を述べることは難しい。敢えてできることは、これやあれは含まれないという定義だけであった。そして、実際にはあいまいな境界はそのままにしておいて、残った無限集合も結局は有限集合の和として提示されるのである。

第一層における詩賦とその他の区分原理の不自然さも、こうであってみればごく当然であったということがわかる。類目は、『文選』にいたるまでに表現者たちが自分の文章を押し込めてきた型であったし、その型の捉え方自体も伝統がはぐくんできたものであったに過ぎないのだ。

『七略』における詩賦略の特異さと、『文選』第一層の分類原理における他との不整然さは実は響き合っている。『七略』が詩賦と言いつつ、配列は賦、詩の順にすることと『文選』の賦、詩の配列はすなおに共鳴する。そして一方で、『七略』における詩賦の数量の少なさと、解説にかけた力の少なさから見える軽視とも言える姿勢(数量自体はけっして劉父子に因るものではなく、時代故のことではあったが)とは対照的に、詩賦は『文選』の巻頭を飾り、数量も質も編者による力の入れようも優れて強くなっている、この様相の大逆転は、まさに周漢以降の「詞人才人」たちが特にどういう表現の型に魅力を感じてきたかということを物語っている。

前漢のおり、劉向父子が書籍を分類した際には賦というジャンルにはエネルギーが満ち、すっきりとした分類を乱すものとして雑賦という類目を置かざるを得なかった。その後、約5世紀の時を経て、『文選』の時代になると、賦は成熟して枯れた文体型ができ、盛りこまれる内容も定まったものとなり、賦の優れた作品を選ぶ際に分類の美しさを乱す「雑」類を置く必要はもはやなくなっていたというわけだ。

4

後漢以降、建安の文学の隆盛を受けて、特に五言詩はめざましく発展し、多くの作品が生み出されていくことになる。『文選』の「詩」もその多くが五言詩である。

そして、第一層の類目である「詩」の下には、「補亡」から「雜擬」までの第二層の分類が置かれている。

最初に置かれる「補亡」は、『詩経』小雅の、篇名と小序のみを残し、詩の本文が記録されない六篇の詩を、小序に基づいて後漢の束皙が補った補亡詩を取める。「詩」の最初にこれが置かれるのは、詩が『詩経』という經典に接続することを表すためである。『七略』では六芸略に分類された『詩経』関係の書籍と詩賦略に分類される詩賦の詩は、違ったものとして認識されていた。いや、同じ詩として関連性は意識されていたかもしれないが、詩賦略の序に詩が『詩経』に源流を持つと記すことはなされなかった。

そして、「詩」を分類する類目も、聖人がかかわった『詩経』から、末尾の雑詩に向かって、聖から俗へ、古から今へ、おおよそは流別という観点から立てられていることがわかる。

『詩経』をつぐものとしての詩が、爆発的に増殖し繁茂する。そのエネルギーが美しい分類をはみ出して、「雑詩」という類目を置かざるを得なくした。では、その「雑詩」という類目にはどのような詩が収められているだろうか。

「雑詩」の最初を飾るのは、「古詩」十九首、そして、李陵の「蘇武に与うる詩」である。これらは、作者未詳の詩で、五言詩の濫觴といえるものであるが、「古詩」は無名氏の無題の詩、李陵の詩は李陵に仮託された古詩である。

以下、建安の詩人の作も並ぶ。そこには、「献詩」、「公讌」といった詩が交わされる場があって目的的に作られるものでもなく、「詠史」や「遊覧」のように詩の主題が確固としたものではない詩が並ぶ。それらは、人生の折々にふと生じた感慨、特定の場や目的にしばられない詩だ。おそらく、その作者の時代背景や社会制度、固有の習慣などを了解していなくても、人類が普遍的に持ち続けてきた不安や悲しみ、喜び、恋慕の情などが歌われていて、時代を超えてその叙情にひたることのできる詩群なのだ。『文選』所収の詩のなかで、現代の日本の読者をもっとも共感を得やすい詩であろう。

五言詩という新たな詩は、かつて人々がそういった心から発する情をうったえた「歌」を継いで、様々な思いを載せる表現となった。『文選』が「歌」に次いで「雑詩」を置くのも、そのような意味があるのだと思われる。

5

では、類目としての「雑詩」は、詩を分類していった結果、どの類目にも入りきれなかった詩を入れる「その他」という、そんな単純な意味合いでの類目だったのだろうか。

「雑詩」には、古詩及び李陵・蘇武に仮託されたと思われる詩を除くと、張衡（後漢）以下、王粲、劉楨、魏文帝（曹丕）、曹植、嵇康（以上、魏の文人たち）、張華、何邵、王讚、棗朶、左思、張翰、張協、陶淵明（以上、晋人）、謝惠連、謝靈運、王微、鮑照（以上宋人）、謝朓（齊人）、沈約（梁人）、以上の作者が明確な詩が収められる。六朝の詩に親しんだ人であるなら、ここに並ぶ顔ぶれがオールスター級であることは説明を要さないであろう。

そして、王粲の「雑詩」一首以下、そのものずばりの「雑詩」という詩題を評するものは、劉楨が一首、曹丕が二首、曹植が六首、嵇康、傅玄、張華、何邵、王讚、棗朶、左思、張翰がそれぞれ一首、張協が十首、陶淵明二首、王微、鮑照が各一首である。

ここに特徴的なことは、まとめると以下ようになる。

- ・後漢より晋に到る、張華より陶淵明までの2世紀間に所属する作者は14名。それに対して、宋齊梁の三代、謝惠連から沈約までの1世紀間に所属する作者は6名。
- ・張華より陶淵明まで、詩の総数は44首、うち、「雑詩」という詩題のものは、30首。謝惠連から沈約まで、詩の総数は、23首、うち「雑詩」という詩題のものは、1首（王微のもの）。

岡村繁氏が早くに指摘するように、『文選』は、宋齊以後の作者、作品の採録に比重がある。それによれば、前漢から東晋まで約600年間の作家は100人、作品の篇数は500篇足らず。一方、宋齊から『文選』編纂の梁まで僅かに100年の間の作家は30人、篇数は250篇であった⁷。

この『文選』全体の数字と比べると、雑詩についても作者、篇数ともに、それほど有意な差があるわけではない。『文選』全体の近世優遇の傾向がここにもあらわれていることが確認できるというだけだ。

しかし、「雑詩」というタイトルの割合は歴然として違っている。いったいこれは何故なのか。

岡村氏が上掲論文で指摘するように、『文選』は宋齊以後の既成の選集に基づいて更に作品を選択した、いわば二次的な選集であったということが、その答であろう。

後世、雑詩という詩題は：

7 岡村繁「『文選』編纂の実態と編纂当初の『文選』評価」（『日本中国学会報』第38集、1986年）

- ・古人の作る所、元と題目有り、撰して『文選』に入るに、『文選』その題目を失い、古人詳らかならず、名づけて雑詩と曰う。(空海『文鏡秘府論』論文意)
- ・雑なる者は流例に拘わらず、物に遇いて即ち言う、故に雑と云うなり。(『文選』李善注、卷二十九王粲「雑詩」注)
- ・興致一ならず、故に雑詩と云う。(『文選』李周翰注、同じく王粲詩への注)

といった解説が目につくが、『文選』が二次的な選集であったということを思えば、先行する選集に雑詩という類目のもとに集められた詩が、今度は詩題としても雑詩とよばれるようになって収録されたと考えるのが自然であろう。

『七略』を思い出していただきたい。色々な賦を集めた書籍に「雑～賦」の名が付けられていた。『隋書』経籍史に収録される、宋齊梁の盛んに編纂された、総集、選集の以下のようなタイトルを眺めるだけで、いろいろな文体を集めた「雑～」なる書籍が多く生み出されたことが想像できる。

『文章志録雑文』、『名士雑文』、『雑文』

『雑都賦』、『梁雑賦』、『雑賦注』

『雑詩』七十九卷江邃撰、『雑詩』二十卷宋太子洗馬劉和注、『二晋雑詩』、『雑詩鈔』謝靈運撰。

他に、雑碑、雑詔など枚挙に暇がない。そして、『雑詩鈔』なる、『文選』雑詩にその作品を多く掲載される謝靈運が編んだ選集があったことは注意されて良い。『文選』雑詩の代表的詩人である謝靈運が「雑詩」という類目に収められるような詩のアンソロジーを編んでいたのである。

『隋書』経籍史総集の序にいうように、建安以降、繁茂していく文章、そして書籍に対応して、閲覧の便のために流別という観点に基づいた選集が編まれるようになっていく。この趨勢の中では、五言詩の制作が並行して盛んになり、「公讌、贈答などのように一定の枠にしばられず、詩人の感興の赴くままにうたわれた詩」⁸が多く生み出されるにいたった。その高エネルギーが選集の類目の中で、美しくおさまりきれない「雑詩」という類目を産み、やがてその「雑詩」に焦点を当てた『雑詩』という選集さえ生み出されるようになる。

ふだんの感興をうたった、宋齊梁の詩人の作品は、既に五言詩によってそういった日常の思いをうたうことが普通になっており、それゆえ、詩題には内容にふさわしいタイトルがつけられるようになった。謝靈運や沈約の雑詩は、唐詩の祖型である。『文選』の編者にとっての近世の詩であった謝靈運たちの詩、それらを配列するに当たって、『文選』はその流別上の源流を漢魏晋の無題詩に取った。古きものは「古詩」というタイトル、その後のものは、「雑詩」という類目に集められた故に「雑詩」というタイトルをつけて。

沈約・謝朓という永明体の代表的詩人以降、謝靈運たちを経て唐の近体詩につながっていく、新風の詩の躍動的なエネルギーが、『文選』の「雑詩」という類目に匂い立っているのである。

「雑詩」は分類から見れば、美しく割り切れない分類上の類目から発生した詩題なのであった。整然とした分類を許さない、おさまりきれないエネルギーをその時代にもった詩、それが雑詩であったとすることができる。

まさしく、日々の感興を詩に託す、そんな後世の詩の一般的なありかたが生まれてきた宋齊以降の詩群を、『文選』や『文選』がもとづいた選集は、雑詩という類目にいれ、「古詩十九首」以来の流別としてうたてたのである。

「雑」という、それ自体はやはりプラスの積極的な意味を持たぬ括りとしての字を冠した詩群が、かくも魅力にあふれたものとなったのは、分類に因る皮肉で興味深い現象であったのだ。

8 一海知義「西晋の詩人張協について」(『中国文学報』第7冊、1957年)